



新緑の山の谷間で、待ちわびた春を謳歌するように、可憐な花を咲かせる一本の桜があります。
虎尾桜。人々は親しみを込めて、そう呼んでいます。
 昨年およそ五千人もの花見客を魅了した桜は、
 十八年前まで、ほとんどの人が、その存在すら知りませんでした。
 人に忘れ去られた桜が、人の手によって命を吹き返した奇跡の物語をたどります。

孤高の一本桜

幽玄

新町の名称の由来であり、象徴でもある福智山。
 その中腹に、**齢六百を数える巨桜**があります。
 息をのむほどの美しさと存在感です。

会いたい。今年もまた

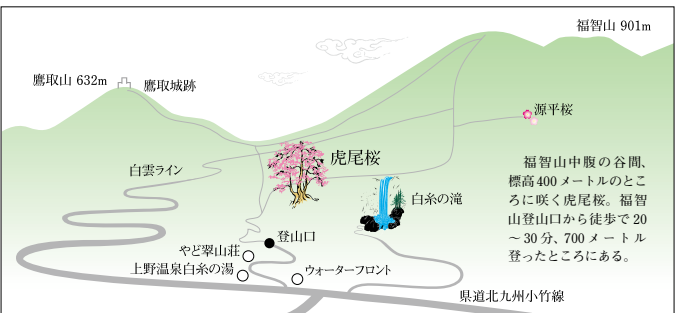
福智山登山口からしばらく登ると、右手に大小の石が転がる沢が見えてきます。小川のせせらぎを聞きながら、案内板に従って右に。小橋を渡り、うっそうと茂る杉林をさらに進むと、緑のすき間から鮮やかなピンク色がこぼれます。焦る気持ちで近づくと、視界が開けた目の前にその巨桜は立っていました。

この山の貴婦人に会うためには、七百メートルの登山道を歩むことが条件。訪れる人を魅了する孤高の一本桜は、福智山の中腹、標高四百メートルの地にそびえています。ため息をつきながら登ったかゝいがある神秘的な美しさに、見上げるだれもが圧倒され、息をのみます。

しかし、毎年数千人以上が仰ぎ見る人気もここ数年の話。虎尾桜には、かつて人々に忘れ去られ、朽ち果てようとしていた時期がありました。いま、凛としてそこにあるのは、瀕死の状態からよみがえった貴重な姿なのです。



【エドヒガン】江戸彼岸（バラ科・サクラ属）
 江戸で春の彼岸ごろに咲いたことから名づけられた。ウバヒガン・アズマヒガンとも呼ばれる。落葉高木で山地に自生し、葉がでる前に淡紅色でやや小ぶりの花を咲かせる。萼筒の元がぶっくりとふくらんでいるのが特徴。本州・四国・九州・中国大陸にかけて分布し、国の天然記念物に指定されている桜の多くがこのエドヒガンである。写真は虎尾桜の花。



虎尾桜

推定樹齢六百年、木の高さ二十三メートル、幹周り三・八三メートルのエドヒガン。同種では県内最大の大樹。名前の由来は、枝先がトラの尾に似ているなど諸説がある。写真は昨年、右ページ上は平成六年に撮影したもの。枝落ちなどで樹形が変化していることがうかがえる。

